

# インド土着文法家の現在語幹形成論

松 村 恒

## はじめに

今日通行しているサンスクリットの共時的な記述文法は、たとえそれがヨーロッパ人の手になるものであっても、インド古来の伝統、就中パーニニアン・スクールのそれに則っている事態を考え合わせるならば、後者のそれを押さえておくことは今尚意義なしとはしない。印欧語比較文法の成果を取り込んだ歴史的記述も見られるが、両者の突き合わせはその後の段階の課題となる。

小論では、現在語幹形成を扱うパーニニ文法を採り上げる。それを Whitney の様に人為的にして非組織的といったネガティブな評価を下すか (Whitney 1941 : 602)、Liebich の様に語根類の配列順に注目すべき意義を認めるか (Liebich 1920 : 49) は意見の分かれるところであろうが、いずれの場合にも必要なストラの実用的平面での理解のためのカーシカー・ヴリッティの当該箇所を解説を試みる。継いで文法事象のものよりも、文法記述の正当性妥当性を検証するマハーバーシュヤの当該箇所を瞥見する予定であるが、これは本稿には含まれず続編にて果たされる予定である。

下線を施した部分がストラ本文であり、続く部分がカーシカー註、後続する小活字の箇所は筆者による解説である。

## カーシカー・ヴリッティ III.1.68-84

### III.1.68 動作者の前には ŚaP がくる。

動作者を示すサールヴァダートウカ接尾辞の前では、語根の後ろに接辞 ŚaP がくる。[ŚaP の] P 音はアクセントを示すためのものである。[ŚaP の] Ś 音は [接辞 a が] サールヴァダートウカであることを示すためのものである。[例] bhavati, pacati.

~~~~~

サールヴァダートウカというのは、III.4.113にて「人称語尾と Ś という添加符号で表示される接辞をサールヴァダートウカという」と定義されるものである。

「動作者の前」というのは所格で示されるが、それは I.1.66 「所格によって示される場合 [文法操作は] それの直前に行われる」というメタルールを根拠とする。

ŚaPのP音がアクセントを示すためのものであるというのは、具体的にはIII.1.4「格語尾とPという添加符号で表示される接辞は低アクセントである」を前提として、低アクセント(アヌダータ)であることを意味している。

ŚaPのŚ音は接辞aがサールヴァダートゥカであることは、上に引いたIII.4.113が根拠になっている。

語根bhūの場合は、人称語尾即ち動作者を示すサールヴァダートゥカ接尾辞が末尾にくるとき、語根の後ろと人称語尾の前、つまり両者の間にŚaPがくる。bhū+ŚaP+tiPは、I.3.9「それ(添加符号)はゼロになる」により、bhū+a+tiとなり、VII.3.84「サールヴァダートゥカ接辞とアールダダートゥア接辞の前では[語幹の最終母音i u r lはグナに代替される]」により、bho+a+tiとなり、VI.1.78「[母音の前で] e ai o auはそれぞれ ay āy av āvに代替される」によって bhav-a-tiとなる。

### III.1.69 div等の後ろにはŚyaNがくる。

[語根表にて] divで始まる語根群の後ろには、接辞ŚyaNがくる。[この規則は] ŚaPがくることを排除するものである。[ŚyaNの] N音はアクセントを示すためのものである。[ŚyaNの] S音は[接辞yaが]サールヴァダートゥカであることを示すためのものである。[例] dīvyati, sīvyati.



divで始まる語根群とは、語根表で4に列挙されているものである。ŚaPの排除とは、この語根群にはひとつ前の規則が適用されないことを示すものである。排除(アパヴァーダ)とは、一般的規則が適用されない補則的なものをいう。『メタルール集』(パリパーシャー)57に定義が見られる。

「div等の後ろ」というのは奪格で示されるが、III.1.67「奪格によって示される場合[文法操作は]その直後に行われる」というメタルールを根拠とする。

ŚyaNのN音がアクセントを示すためのものであるというのは、具体的にはVI.1.197「ÑまたはNという添加符号で表示される接辞が接続したものは、常に第一音節が[高アクセント(ウダータ)である]」を前提としている。

Ś音については、既に前スートラの註で述べられていることの繰り返しである。

div+ŚyaN+tiPは、VIII.2.77「[r vで終わる語根のi uは]子音[で始まる接辞]の前でもまた[長母音化する]」により、div-ya-tiとなる。

### III.1.70 両者は任意に bhras, bhlas, bhras, kras, klas, tras, truṭ, laṣの後ろにも[ŚyaNはくる]。

この規則は両者が任意に用いられることを示す。ṬU**h**rasr ṬU**h**lasr(語根表1.876-877)「輝く」、bhrāmU(4.96)「動揺する」、bhrāmU(1.903)「動く」——これら[即ちbhrāmUと

bhramU] のどちらにも二種の接辞が用いられる。kramU(1.502)「足から投げる」、klamU(4.98)「消耗する」、trasi(4.10)「驚く」、truṭi(6.82 truṭa!)「切る」、laša(1.937)「望む」——これらの後ろには任意に接辞 ŚyaN がきたり [こなかったりする。例] bhrāśate, bhrāśyate. bhlāśate, bhlāśyate. bhramati, bhrāmyati. krāmati, krāmyati. klāmati, klāmyati. trasati, trasyati. truṭati, truṭyati. laśati, laśyati.



「両者が任意に」という表現の「両者」は曖昧である。常識的に見ると、III.1.68-69で規定された ŚaP と ŚyaN であろうが、列挙された例のうち truṭati の a は ŚaP ではない。もし ŚaP であれば \*troṭati となるべきだからである。これは Sa の例となり、a は高アクセントである。ジネーンドラブッディは複註『カーシカーヴィヴァラナパンジカー』において、「スートラ本文で「両者は任意に」とあることより、揺れ動くの意味の bhram 及び klam, tras は div 等の語根群に属するから、ŚyaN だけがかかることになってしまうが [これは正しくない]。truṭ は tud 等の語根群に属するから [Sa が後続し]、bhras 等は bhū 等の語根群に属するから [ŚaP が後続するので、共に ŚyaN が続かないことになってしまう]。と説く。」この複註の説明を参照すれば、〈両者〉というのは、bhū 群の場合は ŚyaN または ŚaP、tud 群の場合は ŚyaN または Sa ということになる。

bhrāmyati の長い ā は、VII.3.74「ŚyaN の前で、sam を初めとする8つの [語根の母音は] 長音で代替される」に基づく長音化である。8つの語根とは、語根表の4.92-99に相当し、bhram は4.96である。

krāmati, krāmyati の長い ā は、VII.3.76「能動態の kram は [Ś を付加符号とする接辞の前で、長音が代替する]」に基づく長音化である。

klāmati, klāmyati の長い ā は、VII.3.76「能動態の kram は [Ś を付加符号とする接辞の前で、長音が代替する]」に基づく長音化である。

### III.1.71 接頭辞が前接しない yas の後ろにも [ŚyaN が任意にくる]。

yasU「努力する」は div で始まる語根群に属するものである。[それ故に III.1.69 の規則から] この語根の後ろには ŚyaN が常に規定されてしまうことになるが、これは正しくない。接頭辞が前接しない場合に限り、選択形が教えられる。接頭辞を伴わない yas の後ろには ŚyaN 接辞が任意にくる。[例] yasyati 又は yasati. 接頭辞が前接しない場合に限りと言われるのは何故か。[例] āyasyati, prayasyati.



yasU は語根表4.101に当たり、div 群に属するので、III.1.69により ŚyaN だけがかかることになってしまうが、この規則を置くことにより、III.1.70に列挙された語根と同様に二形が可能になる。

尚添加符号 U は VII.2.56「U を添加符号をして持つ語根は任意に [Ktvā に iT が添加される 2]」ということを示すものである。

### III.1.72 samyasの場合にも [ŚyaNが任意にくる]。

この規則が置かれるのは、[yasが] 接頭辞を伴った場合のためである。samが前接しているyasの後ろには「接頭辞がある場合を規定するIII.1.71の規定に反して」ŚyaN接辞が任意にくる。[即ち] saṃyasyati, saṃyasati.



samという前接辞があるのに、二形があることを認めて、直前のスートラの例外であることを示す。

### III.1.73 suなどの後ろには Śnuがくる。

[語根表にて] ṣuṅ「押し出す」で始まる語根群の後ろには接辞Śnuがくる。[この規則は] ŚaPがくることを排除するものである。[例] sunoti, sinoti.



suで始まる語根群とは、語根表5に当たる。

ṣuṅのṅはI.3.72「曲アクセントもしくはṅを添加符号として持つ語根は、動作の結果が動作者のためのものである場合、中動態となる」という意味のものである。

### III.1.74 śruに対してśrが代替する。

śruの後ろには接辞Śnuがくる。この[Śnuとの] 連結が起こるにあたって、śruに対してśrが取って代わるといふ代替が起こる。[例] śṛṇoti, śṛṇutaḥ, śṛṇvanti.



śruは語根表1.989に当たる。

「śruに対して」は属格で示されるが、I.I.49「第6語尾の付いた語はそこに[文法操作が]起こることを示す」といふメタルールを根拠とする。

śru+Śnu+tasはśṛ-ṇu-taḥとなる。

### III.1.75 akṣの後ろでは任意である。

akṣU「満ちる」はbhūで始まる語根群に属するものである。この語根の後ろには[ŚaPの他に] 任意に接辞Śnuがくる。[例] akṣṇoti, akṣati.



akṣUは語根表1.684に当たる。

### III.1.76 細くするの意味のtakṣの後ろでも[任意である]。

takṣU/tvakṣU「細くする」。この語根が「細くする」の意味で使われる場合、その後ろには[ŚaPの他に]任意に接辞Śnuがくる。語根には複数の意味があるから、「細くする」といった様に特定の意味に限定する指示があるのである。[例] takṣati kaṣṭham, takṣṇoti kaṣṭham[「木を削って細くする」]。「細くする」というのはどうして言われるのか。[例] saṁtakṣati vāgbhiḥ[「言葉で傷つける」]。

~~~~~  
takṣU/tvakṣUは語根表1.685-686に当たる。

### III.1.77 tud等の後ろにはŚaがくる。

[語根表にて] tud「突き刺す」で始まる語根群の後ろには、接辞Śaがくる。[この規則は] ŚaPがくることを排除するものである。Ś音は[接辞aに]術語名称サールヴァダートウカが当てはまることを示すためのものである。[例] tudati, nudati。

~~~~~  
tudで始まる語根群とは、語根表6に当たる。

ŚaPでなくŚaがくるとどう違うのかというと、I.2.4「添加符号Pを持たないサールヴァダートウカ接辞は[添加符号Nを持つものと同じ扱いを受ける]」という規則に基づいて、先行する母音のグナ化は起こらない。よってtud+Śa+tiPはtud-a-tiとなる。

### III.1.78 rudh等の後ろにはŚnaMがくる。

[語根表にて] rudhIR「妨げる」で始まる語根群の後ろには、接辞ŚnaMがくる。[この規則は] ŚaPがくることを排除するものである。M音は[接辞が置かれるべき]場所を規定するためのものである。Ś音は「[語幹において] ŚnaMの後ろではN音が省略される」[というVI.4.23の規則]により他のnaとは区別されることを示すためのものである。[例] runaddhi, bhinatti。

~~~~~  
rudhで始まる語根群とは、語根表7に当たる。

添加符号Mは、I.1.47「添加符号Mを持つものは、直前の母音のすぐ直後にくる」という規則によって、その位置を示す。

rudh+ŚnaM+tiP>ru+na+dh+ti>ru-na-ddhi

### III.1.79 tan等とkrの後ろにはuがくる。

[語根表にて] tanU「拡げる」で始まる語根群及び kr̥Ñ の後ろには、接辞 u がくる。[この規則は] ŚaP がくることを排除するものである。[例] tanoti, sanoti, kṣaṇoti. kr̥Ñ の後ろでもまた同様である。[即ち] karoti. tan 等の語根が [語根表で] 列挙されていることより、接辞 u が接続することが [語根 kr̥Ñ の場合にも] 正しく確定しているので、[わざわざ明示する必要がないにも拘わらず] kr̥Ñ をも [ストラ中に tan 等と並べて] 列挙しているのは、tan 等に適用される他の操作が kr̥Ñ に適用されてはならないという制限を設けるためである。[例えば「tan 等の語根群の後ろでは [sIC は]、ta thas が後続するとき、[任意に省略される]」という II.4.79 の規則を適用して、kr̥Ñ の場合にも] sIC を省略するのが任意であってはならない。[例] akrta, akrthah.

~~~~~

tan 等というのは、語根表で 8.1-10 に当たる。kr̥ は 8.10 なのでそこに含まれるから、ストラでわざわざ別立して列挙しているのは何故かという議論が註で展開されているのである。

a+tan+sIC+ta にあって、sIC の省略は任意であるから、a-ta-ta(n) の省略は VI.4.37) と a-tan-i-s-ta の二形が可能であるが、kr̥ の場合は a-kr̥-ta という形しかない。但し最後者の形は、sIC の省略によって得られたのではなく、VIII.2.27 「短母音で終わる語幹の後ろでは [半母音・鼻音以外の子音で始まる接辞の前で s は省略される] という規則に基づくものである。

kr̥Ñ+u+tiP にて u の前で r̥ はグナ化するが、まず a となり、次に I.1.51 「r̥ の代替の a i u は常に r に後続される」により ar となるから、kar-o-ti となる。

### III.1.80 dhinvI kr̥nvI の後ろに [u がくる] と同時に a の代替が起こる。

hivI, dhivI, jivI 「喜ばす」の意味をもつもの、kr̥vI 「害する及びなす」というものの二種の語根の後ろには接辞 u がくる。[dhiv と kr̥v の] 最終音に対しては、a 音が代替される。[例] dhinoti, kr̥noti. a 音の省略は [I.1.57 により] 代替されたものと同じ扱いを受けるので、グナは現れない。

~~~~~

ストラでは dhi(n)vI だけが挙がっているが、語根表では hivI(1.622) divI(623) dhivI(624) jivI(625) がセットとして列挙され、意味もこの四つに対してまとめて与えられている。註ではこのうちの二番目のものを除いて三つが挙げられている。kr̥vI は語根表では 1.629 に当たる。

添加符号 I は、VII.1.58 「添加符号 I を持つ語根 [は語根母音] の直後に nUM が付けられる」という意味である。これにより語根表の dhivI kr̥vI がストラでは dhinvI kr̥nvI となっているのである。

a の代替が起こるのが語根の最後の音であるというのは、メタルール I.1.52 により決められている。

dhinv+u+tiP は、dhina+u+ti となり、VI.4.48 「[アールダダートウカ接辞の前で語幹末の] a に対してはゼロの代替が起こる」という規則に基づいて dhin+u+ti となる。dhin の i がどうしてグナ化しなかつたかというと、I.1.57 「後続するものによって起こされた母音の位置に於ける代替には、規則

が代替される前の母音に及ぼした効力と同じものが及ぶ」により、uの直前の母音とはaの代替のゼロであって、iではないからである。

### III.1.81 kri等の後ろにはŚnāがくる。

[語根表にて] DUKriÑ 「物品を交換する」で始まる語根群の後ろには、接辞Śnāがくる。[この規則は] ŚaPがくることを排除するものである。Ś音は [接辞aに] 術語名称サールヴァダートウカが当てはまることを示すためのものである。[例] kriṇāti, priṇāti.



DUKriÑ に始まる語根群というのは、語根表9に当たる。

kri+Śnā+tiP>kri-ṇā-ti

### III.1.82 stambh stumbh skambh skumbh skuの後ろにはまたŚnuがくる。

最初の四つの語根 [即ちstambhU, stumbhU, skambhU, skumbhU] は、[語根表には現れず] スートラだけに現れるものである。skuÑ 「飛び跳ねる」 [は語根表9.6に現れるものである]。これら [の語根] の後ろには、接辞Śnāが現れる。またŚnuも [現れる。即ち] stabhnāti, stabhnoti; stubhnāti, stubhnoti; skabhnāti, skabhnoti; skubhnāti, skubhnoti; skunāti, skunoti. [初めの四語根に付いている] Uはitたるものであると認識されるので、スートラだけに現れる語根にも [語根表に現れる語根に教えられる] すべての [規則の] 内容が [適用されるものと] 認められる。この語幹形成接辞(ヴィカラナ) [即ちŚnu] だけの対象領域というわけではない。



添加接辞Uについては、III.1.71への解説中に引いたVII.2.56を参照。このスートラにより、ヴィカラナのみならず、-tvāが後続することが了解されるので、従って他の接辞も後続することが暗に了解される。

### III.1.83 子音の後ろにしてhiの前ではŚnāに対してŚānaCが代替する。

子音に後続し、hiに先行する接辞Śnāに対してŚānaCの代替がある。[例] muṣāṇa, puṣāṇa. 子音に後続し、と言われるのは何故か。[本規則が適用されない例] kriṇihi. hiに先行し、と言われるのは何故か。[本規則が適用されない例] muṣṇāti. Śnāに対して、と言うのは、[ŚānaCがŚnāに対しての] 代替物であることを理解させるために、被代替物の位置を教えるものである。これを述べておかないと、[ŚānaCは子音に後続し、hiに先行する] すべての場合に後接する接辞であると理解されてしまうからである。



ŚānaCのCについては、VI.1.159「添加符号Cを持つものは、[最終母音が高アクセントである]」により、高アクセントの位置の指示であるが、この場合は除外される。というのは、III.1.3「[接辞とは後続し]且つ第一母音が高アクセントであるものである」と規定されているからである。一語の中に高アクセントの音節は一つだけしかないというのはメタルールである(VI.1.158)。

mus+Śnā+hi>muṣ+ŚānaC+hi>muṣ+āna+hiとなり、III.4.105「aで終わる語幹の後ろでhiにはゼロが代替する」により、muṣ-ānaとなる。尚hiはIII.4.87「[命令法では]siに対してhiが代替し、これは添加接辞Pを持たない」により、高アクセントであることが知られる。

### III.1.84 古聖典においてはŚāyaCもくる。

古聖典の領域では、Śnāに対してŚāyaCの代替がある。またŚānaC [の代替があることもある。例] grbhāya jihvayā madhu. また実にŚānaC [の例] badhāna paśum.



ŚāyaCのCについては、前ストラへの解説中のものと同様である。

註の例文の最初の例は『リグ・ヴェーダ』VIII.17.5c；『アタルヴァ・ヴェーダ』XX.4.2cに見られる。第二例の類例として『カウシカ・ストラ』62.21a badhāna vatsam.

### 補足：2類、3類、10類の規則

2類、3類、10類の動詞語根については、ŚaPの規則のヴァリエーションと見なされたためか、上の規則と並列されることはなく、別の位置の置かれている。補完のためにそれらを補いとして添えておこう。

### II.4.72 adに始まる [語根群] の後ろでは ŚaP に対して [ゼロの代替がある]。

adIに始まる [語根群] の後ろでは、ŚaPに対してゼロの代替がある。[例] atti, hanti, dvesti.



adに始まる語根群とは、語根表 2 に当たる。

adI+ŚaP+tiP>ad+ti>atti.

### II.4.75 juhoti等の後ろでは [ŚaP に対して] ゼロの代替があり、語根を重複させる。

ŚaPの効力が及んでいるのであって、yaÑではない。juhoti等の [語根群] の後ろでは、ŚaPに対してゼロの代替があり、語根を重複させる。語基(プラクリティ)にゼロの代替があ



るとき、シュルの規定は語を重複させるためのものである。[例] juhoti, bibheti, ninekti.



huに始まる語根群とは、語根表3に当たる。

シュルの規定については、VI.1.10「語幹形成接辞sluが後続するときには[重複していない語根の重複が起こる]」にある。

III.1.25 satyāpa, pāśa, rūpa, vīṇā, tūla, śloka, senā, lona, tvaca, varma, varṇa, cūrṇa, cura等の後ろにはNiCがくる。

satyaに始まりcūrṇaに終わるものの後ろ、及びcuraに始まる [語根群] の後ろには、接辞NiCがくる。[例] 真実を言うの意味でsatyāpayati.

#### 依用文献

Böhtlingk, Otto. 1887. *Pāṇini's Grammatik*. Leipzig: Haessel; Nachdr. Hildesheim: Olms, 1964.

Dwarikadas Shastri and Kalika Prasad Shukla. 1965-67. *Nyāsa or Pañcika commentary of ācārya Jinendrabuddhipāda and Padamañjari of Haradatta Miśra on the Kāśikāvṛtti (commentary on the Aṣṭādhyāyī of Pāṇini) of Vāmana - Jayāditya*, 6 vols. (=PBS 2-7). 1-2: Varanasi: Prachya Bharati Prakashana, 3-6: Varanasi: Tara Publications.

Kielhorn, Lorenz Franz. 1868. *The Paribhāṣenduśekhara of Nāgojibhaṭṭa*, part I: the Sanskrit text and various readings (=BSPS 2, 7). Bombay: The Indu Prakash P.

Liebich, Bruno. 1920. *Zur Einführung in die indische einheimische Sprachwissenschaft: 2: Historische Einführung und Dhātupāṭha* (=SHAW 1919.15). Heidelberg: Winter.

Shefts, Betty. 1961. *Grammatical method in Pāṇini: his treatment of Sanskrit present stems* (=AOSE 1). New Haven: American Oriental Society.

Whitney, William Dwight. 1889. *Sanskrit grammar, including both the classical language, and the older dialects, of Veda and Brahmana*<sup>2</sup>. 8th issue: Cambridge, Mass.: Harvard U.P., 1955.